

養泉寺

養泉寺は寺泊の北側にある、浄土真宗に属する小さな寺です。養泉寺の印象的な本堂には極楽浄土を象った絵画や金色の装飾が施され、苔むす中庭は四季折々の美しさを映し出します。境内を参詣する場合、本堂には自由に入れますが、庭園や客殿の見学を希望する場合は、事前に電話で予約する必要があります。

歴史

1594年、信濃国（現在の長野県）出身の僧、浄明によって開かれました。僧侶になる前の浄明は、金井藤之丞中原安範という武将で、強大な武将武田信玄（1521-1573）に仕えていました。武将として頭角をあらわしたが、1573年の武田信玄の逝去に深く心を痛めました。世の無常さに目覚めた彼は、刀を捨て、戦場で亡くなった人を弔うために出家することを決意しました。彼は浄明と名乗り、浄興寺という寺の僧となりました。浄興寺は数年前の戦火で焼失し、浄明自身もその戦いに参戦していました。

20年にわたる修行の後、浄明は住職から、浄土真宗の信者が多く、宗教的指導者を必要としている弥彦へ向かうよう指示されました。旅の途中、浄明は寺泊を通過し、やがてそこで養泉寺を建立することを決意しました。

本堂：極楽浄土の光景

現在の本堂は 1999 年に再建されたものです。本堂には本尊の阿弥陀如来像が安置されています。阿弥陀如来像の正確な年代は不明だが、およそ 300 年前のものと考えられています。一般的な仏像はまっすぐ立っていますが、この仏像はかなり前のめりに傾いています。これは、阿弥陀如来が目の前の人々を救いたいという願いにより、一步前に踏み出しておられるからと言われています。その像の両脇には、浄土真宗の開祖である親鸞（1173-1263）と、その子孫で浄土真宗の勢力を拡大したとされる蓮如（1415-1499）を描いた掛け軸が厨子に飾られています。左側の余間の壁には、日本に仏教を広めたとされる聖徳太子（574-622）と浄土真宗の七祖を描いた掛け軸があります。

本堂は、浄土真宗の教えにより、阿弥陀如来を信じて念仏を唱えれば人々が死後に生まれ変わるという極楽浄土を表しています。内陣の壁板には浄土真宗の救いの象徴である蓮の花が描かれ、金色の欄間には雲の中で楽器を演奏する天女の姿が彫られています。

庭園と客殿

本堂と客殿の間には、モミジの木陰になる池泉の庭園があります。各所に灯籠が置かれ、苔むした地面にはかつて佐渡の金山で使われていた石臼が据えられています。庭園は紅葉の名所でもあり、モミジの紅葉と苔むした庭園の緑のコントラストが美しいです。庫裡の中から眺めることも、客殿に立って上から眺めることもできます。

養泉寺の客殿は 2 階建てです。2 階は、江戸時代（1603-1867）から続く寺泊の名門旅館「於しきや五平」の応接間でした。1932 年に旅館が廃業すると、住職が建物の一部を買い取り、養泉寺に移築させました。内部には和室と洋室があり、木製の掛け時計、茶道具の棚、丸窓、アンティークの座敷椅子、下半分が曇っていて通りを歩く人々の視線からゲストを守るガラス窓など、20 世紀初頭のデザイン要素が見られます。

寺院の敷地

木製の門から本堂へと続く道の左側に、小さな二つの堂があります。一つ目は経蔵で、三世紀以上にわたる御門徒に関する記録が保管されています。もう一つは太子堂で、ここには聖徳太子の像があり、毎年 8 月に本堂へ移されて太子講が行われます。二つの堂の間には、浄土真宗の開祖である親鸞聖人の大きな像が立っています。